4．バタ．国

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の関係で一部変更した箇所があります。）

待ち合わせ場所にすでに相手が到着していて、しかもそのひとが後ろ向きに立っていたような場合、一瞬、どんなふうに声をかけようかと、迷いながら背後からそのひとに近づいていく。

前からだったら、目と目があえば、それで済む。待った？　久しぶりね、さあ、行こう――会話は船のように自然と進む。①

ヒトの無防備な背中を前にすると、なぜか言葉を失ってしまう。つきあってきたのは、どのひととも、彼らの正面ばかりのような気がして、a心もとなく、背中を眺めやる。

そのひとが、くるっと後ろを振り向けば、ただちにわたしは、そのひとの世界に合流できるのに、②後ろ姿は、閉ざされた扉だ。

そのままわたしが行きすぎれば、そのひととわたしは永遠に交わらないまま、これを最後に別れてしまうかもしれない。

待ち合わせの約束を、一方的に③破キするのだから、これは裏切りだが、出会うことは常におそろしい衝突でもあるから、衝突をさけて、ひとの背後を、ひたすら逃げ続けるという生き方もある。例えば、犯罪者か逃亡者のように。

そういう考えが、ひとの背を見ながら、わたしのなかにひょこっと現れる。そのことはわたしを、少し驚かす。わたしは何かを恐れている。

そもそも背中は、そのひとの無意識が、あふれているように感じられる場所である。だから、誰かの後ろ姿を見るとき、見てはならないものを見たようで、b後ろめたい感じを覚えることもある。

背中の周りに広がっているのが、そのひとの「背後」と呼ばれる空間だ。自分の視線がまったく届かない、見えない後

ろ半分のこと。④わたしはこの空間になぜか惹かれる。見えない、というところに惹かれているのだろうか。

ひとは自分の背後の世界で、何が起きているのか、知り得ない。だから背後は、そのひとの後ろに広がっているのに、そのひとだけを、ユイイツ(ア)、排除して広がっている。

背後という空間から、その人自身が排除されているといっても、それはひとと背後が、無関係であるということではない。振り返りさえすれば、いつでもひとは、自分の背後がそこにあることに気づく。もちろん、振り返ったのち一瞬にしてそこは背後ではなくなるわけだが、先ほどまで背後としてあったケハイ(イ)は、すぐには消えないで残っている。そのとき今度は正面であったところが、自分の背後と化している。しかし意識が及ぶのは、常に現前の世界で、背後のことはソクザ(ウ)に忘れられる。視線の行くところが、意識の向くところだ。だから目を開けて、背後を考えるのは、開いている目を、ただの「 I 」とすることに他ならない。その I のなかを、虚しい風が通り抜けていく。背後を思うとき、⑤自分が、がらんどうの頭蓋骨(ずがいこつ)になったような気がする。

ひとと話をしていて、話の途中で、そのひとの背後に、ふと視線が及ぶことがある。

何かとても大切なことを話しているときに、後ろで、樹木がはげしく風に揺られていたり、夕日がまぶしく差し込んでいたり、鳥が落ちてきたり、滝が流れていたり、不吉な雲が流れていたりするのに目がとまる。

不思議な感じがする。こちら側の世界と触れ合わない、もうひとつの世界が同時進行で存在している。そのことに気づくとおそろしくなる。⑥背後とはまるで、彼岸のようではないか。

そしてわたしが見ることができるのは、常に、他者の背後ばかりだ。見えるのが、いつも、ひとの死ばかりであるということと、これはまったく同じ構造。

自分の死が見えないように、自分の背後は見えないし、そもそもわたしは、自分の後ろ側など、まるで考えもせずに暮らしている。見ることができないし、見る必要もないのだ。

ただし、着物を着て、帯の具合を見たいときなど、あわせ鏡で確認することはある。このことを考えると、やっぱり鏡とは、エマキョウへひとを誘う道具であると思う。しかも、背後へは、この道具をダブルで使用しなければならないのだから、ひとが自分の背後へ到達することの、おそろしさと困難さがわかろうというものだ。

ともかく、背後は死角である。

死角を衝かれる時、ひとは驚く。わたしがオボウトウに、後ろからどう、ひとに声をかけようか、と迷ったのも、相手をびっくりさせないためにはどうするのがいいのか、という思いもあった。

そもそも身体に触れないで、声だけで、そのひとを振り向かせることはできるのだろうか。

簡単なのは、名前を呼ぶことだ。こうしてみると、名前というのは、そのひとを呼び出す強力な呪文みたいなものである。

わたしは会話のなかで、対面するひとの名前を呼ばずして、そのひとと会話を進めることに、いつも居心地の悪い思いを持つ。⑦あなたという二人称はあるけれども、［Ⅱ］名詞で呼びかけずにはいられない。相手のひとにも、名を呼んでほしい。

名前を呼ばずに、例えば、あのーお待たせしましたとか、小池でーす、こんにちは、とか、そういう類の言葉を投げかけて、そのひとが確実に振り向くかどうか。わたしにはほとんど自信がない。

だからそういうとき、やっぱり、相手の肩のあたりを、ぽんと軽く叩くかもしれない。あるいはわざわざ［Ⅲ］へ、ま

わるか。

⑧背後の世界をくぐるとき、わたしたちは一瞬にしろ、言葉というものを、放キしなければならないということなのだろうか。

（小池昌代『背・背中・背後』）

問1　═══線部ア～オをそれぞれ漢字に改めなさい。

問2　～～～線部a・bの意味として適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a　心もとなく

ア　相手を思いやって心を痛める様子
イ　はっきりせず理解しがたい様子
ウ　心の中でこっそりと思う様子
エ　どこか頼りなくて不安に思う様子

b　後ろめたい

ア　自分が悪いことをしたと感じる様子
イ　気にかかって落ち着かない様子
ウ　必要以上にあれこれと推測する様子
エ　何を考えているのか分からない様子

問3　――線部①「ヒトの無防備な背中を前にすると、なぜか言葉を失ってしまう。」について、それは「背中」がどのような場所だからですか。文章中の言葉を使って四十字以内で答えなさい。（句読点を含む）

問4　――線部②「後ろ姿は、閉ざされた扉だ。」について、ここで使われている表現技巧を答えなさい。

問5　――線部③「破キ」について、「キ」を漢字表記すると何画になるかを答えなさい。

問6　――線部④「わたしはこの空間になぜか惹かれる。」について、「わたし」は「この空間」のどのようなところに惹かれるのでしょうか。「この空間」の指示内容を明確にして答えなさい。

問7　空欄［Ⅰ］に入る語を漢字一字で答えなさい。

問8　――線部⑤「自分が、がらんどうの頭蓋骨（ずがいこつ）になったような気がする。」について説明した次の文章の空欄A・Bに入る語句を、それぞれ指定された字数で答えなさい。

「がらんどう」とは［A（五字以内）］という意味で、まさに自分の頭が骨だけとなったという感覚的な表現になっているが、そう表現することによって、自分の［B（三字以内）］を感じているということ。

問9　――線部⑥「背後とはまるで、彼岸のようではないか。」とはどういうことかを説明しなさい。

この問題についてX先生とY竹君、Z子さんが話しています。Y竹君が考えた［　答え　］を答えなさい。

X先生　「今回の文章は2005年の東京大学入試問題の第4問で出題された文章です。――線部については、どういうことかを説明する問題になっていました。『たとえるもの』と『たとえられるもの』との間の共通点を考えてみることで、東京大学の入試問題に挑んでみましょう。」

Y竹君　「彼岸花って花の名前を聞いたことがあるけど、『彼岸』というのは何のことなんだろう？」

Z子さん　「辞書で調べてみると、もともとは川の向こう側という意味みたいだけど、ここでは仏教の言葉として、現実世界（この世）を示す此岸（しがん）に対して、三途（さんず）の川の向こう側、つまり、死の世界（あの世）を意味しているんだと思うよ。」

Y竹君　「ということは、『たとえるもの』が『死の世界』で『たとえられるもの』が『背後』ということになるね。」

X先生　「いいところまで考えられています。ではそれぞれの共通点を考えてみましょう。」

Z子さん　「――線部の直後に『わたしが見ることができるのは、常に、他者の背後ばかりだ。見えるのが、いつも、ひとの死ばかりであるということと、これはまったく同じ構造』ってあるね。ということは『背後』を他者についてと自分についてまとめ、『死の世界』についても他者と自分についてまとめた上で、この二つが共通するということを答えたらいいんだね。――線部から少し後方に、『ともかく、背後は死角である。』とあるので、これも参考にして答えを考えてみようよ。」

Y竹君　「［　　］。」という答えでいいですか。」

X先生　「いい解答ができましたね。」

問10 ――線部⑦「あなた」・空欄［Ⅱ］について、

i ――線部⑦「あなた」は文法的には名詞になりますが、名詞の細かな分類では何名詞になりますか。

ii 空欄［Ⅱ］に入る言葉を漢字二字で答えなさい。

問11 空欄［Ⅲ］に入る言葉を文章中から漢字二字で抜き出しなさい。

問12 ――線部⑧「背後の世界をくぐるとき、わたしたちは一瞬にしろ、言葉というものを、放キしなければならないということなのだろうか。」について説明した次の文章の、［　　］に入るものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

「くぐる」というのは、物の下を通り抜けるという意味だから、「背後の世界をくぐる」というのは、相手が意識していない世界を通り抜けて、意識している世界に向き合うということになる。しかし、「言葉というものを、放キしなければならない」とあるのは、人との強い結びつきを願ったとき、言葉による意識の世界だけでなく、［　　］という思いを、筆者が抱いたからだと考えられる。

ア 自らの意識が届かない背後に対しても関心を持たなければならない

イ 出会うことによって起こる衝突をさけるわけにはいかない

ウ 言葉が無力な無意識の世界にまで関わり合わなければならない

エ あまり関わりのない人とも深く分かり合えるようになりたい

問13　文章中には、形式段落を構成する次の一文が抜けています。入る直後の形式段落の始めの五字を答えなさい。

それはわたしが、何か強い結びつきで、この同じ場に、対話の相手を呼び出し、呼び出されたいと願うからなのだろう。

※　問題は以上で終了です。

令和4年度　入学試験　模範解答　「国語」

京都共栄学園高等学校・バタビアコース

受験番号	氏名	採点

問1
ア　唯一
イ　気配
ウ　即座
エ　魔境
オ　冒頭

問2
a　エ
b　ア

問3
背中はひとの無意識があふれているように感じられる場所で、後めたく感じるから。

問4
隠喩（暗喩）
※「比喩」は減点

問5
13画

問6
「この空間」、つまり背後は、そのひとの後ろに広がっているのに（も関わらず）、そのひとだけを排除しているところ。

問7
穴

問8
A　中身がない
B　無力さ

問9
人は他人の背後は見えるが、自分の背後は死角になっている点と、
他人の死を看取ることはできても、自分の死を見ることはできない点で、
両者は似通っているということ。

問10
i　代名詞
ii　固有

問11
正面

問12
ウ

問13
名前を呼ば